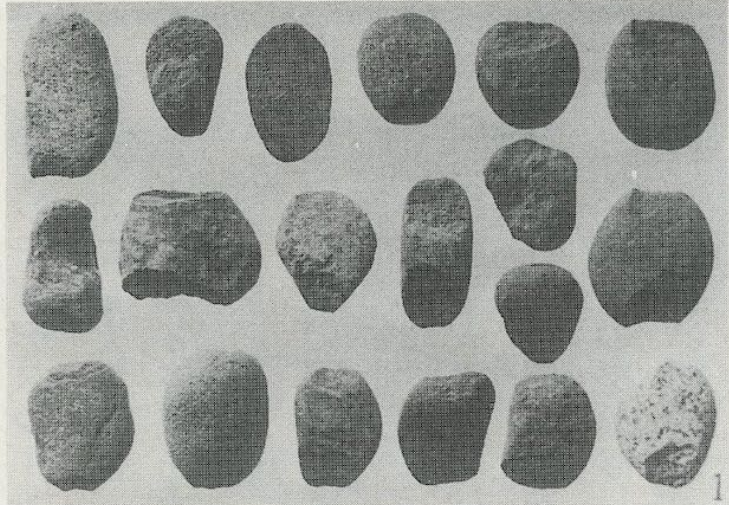


## 川とともに生きる (8)

石錘(せきすい)。特に縄文時代に多く使われていた石器の一つで、おもりにいしとも呼ばれます。五ヶ前後の偏平な石の両端を打ち欠き、おもりに魚網に結わえて重りとして使用されていました。

市内下米田町の牧野小山遺跡ではこの石錘が約二三〇個出土しています。(昭和四十七年の発掘調査による左の写真)ほかの石器と比較して石錘の数が目立って多く、当時、木曾川を利用した漁業が盛んに行われていたことを物語るものです。

牧野小山遺跡から約一七<sup>メートル</sup>下



流にある集落址・炉畑遺跡(各務原市)からも数多くの石錘が見つかっています。

その両遺跡で、出土した石錘の重さを比較してみると牧野小山遺跡の方が、炉畑遺跡のものに比べて全体に重い傾向があります。これは牧野小山遺跡がより上流にあり、木曾川の流れが速かったことと無関係ではないように思われます。

この石錘は、時代が下るに従い、土で焼かれた「土錘」に変わってゆきます。

今回、次の方々から貴重な資料を市教育委員会に寄贈いただきました。ありがとうございます。

●井戸のツルベ ほか二点

(朝日将登さん/三和町)

●箱膳 一点

(朝日義春さん/三和町)

●トビナタ、ヨキ 各一点

(市原理雄さん/三和町)

●米選用ウチワ 一点

(三品視喜雄さん/深田町)

●農耕用鍬 ほか二点

(井戸俊太郎さん/本郷町)

近い将来の博物館建設に向けて情報や資料を集めていますので、市社会教育課(内線二六一)までご連絡ください。